

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720164

研究課題名(和文) 日本中世禅林における杜詩受容の研究

研究課題名(英文) Study on Acceptance of Du Fu's poems in Japanese medieval Chanlin

研究代表者

太田 亨(Ota, Toru)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：80370021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本中世禅林における杜甫の詩の受容について、日本で出版された杜甫の作品集、禅僧の杜甫の詩に対する解釈、禅僧の詩文中に見える杜甫等を追究した。その結果、日本で出版された杜甫の作品集には多くの書き入れが残されていること、禅僧の杜甫の詩に対する解釈には貴重な価値があること、禅僧が杜甫の忠義や禅的要素に着目していたことが判明した。

研究成果の概要(英文)：I investigated on Acceptance of Du Fu's poems in Japanese medieval Chanlin. The contents are the works of Du Fu published in Japan, Zen monk's interpretation to Du Fu's poems, Du Fu who are visible to a Zen monk's work and so on. As a result, I found out that the sentences written down are left in the works of Du Fu published in Japan, zen monk's interpretation to Du Fu's poems has valuable value, zen monks paid attention to Du Fu's loyalty and element of zen.

研究分野：中国文学

キーワード：禅林文学 杜甫 抄物 五山版 日本漢文学

1. 研究開始当初の背景

日本における漢文学の受容史上、その成果が極めて顕著に世に示された時期が三度存在する。第一期として奈良・平安時代の貴族の漢詩文、第二期として鎌倉末期より室町時代に栄えた五山禅僧の漢詩文、第三期として江戸時代の文人の漢詩文がそれにあたる。近來の日本漢文学の研究を概観すると、第一期の奈良・平安時代と第三期の近世江戸時代の漢詩文に眼が向けられる傾向が強い。そのため、中間の鎌倉・室町期の禅僧の作品は、その存在を認められながらも、敬して遠ざけられていると言える。

さらに中世禅林における中国文学受容に関する研究について言えば、従来の研究方法は国文学研究領域と中国文学研究領域が間断されており、広い視野から見た統合的な研究がなされていない感がある。そのため中国文学がどのように日本中世禅林の文学に受容されていったかについて解明する必要がある。

筆者は、本研究以前に、科学研究補助金を得て、柳宗元の詩文集がどのように日本に流入し、禅僧がそれらをどのように解釈し、自身の詩文作成に昇華させていったか、といった点について研究した。また杜甫の詩文集についても、その初期(鎌倉時代末期から南北朝時代末期まで)の受容については考究した。

本研究は、日本中世禅林における杜詩の受容について、中期(南北朝時代末期から応仁の乱頃まで)以降の受容を解明することにある。

2. 研究の目的

筆者の研究の全体構想としては、中国における様々な文人が製した詩文集・総集がどのように日本に流入し、禅僧がそれらをどのように解釈し、自身の詩文作成に昇華させていったか、ということ解明することである。

本研究の目的は、杜甫の詩文がいかに禅林において受容されていたかについて解明することである。この度の交付期間においては、

中期(南北朝時代末期から応仁の乱頃まで)以降の受容について詳しく考究する。とりわけ、三年間という期間の中で、下記 ~ について、さらに深く追究することを主たる目的とする。

: 日本中世禅林で製された杜甫の詩文集(五山版)の実態・受容を解明すること

: 禅僧が杜甫の詩文について注解した抄物(慶應義塾図書館所蔵『大堂供奉帳』紙背)の実態を解明すること

: 中期における禅僧が、自身の詩文に杜甫に関する事項をどのように詠出したかについて解明すること

三点について深く掘り下げて研究を行う。加えて、杜甫の受容の特徴を確かめるためにも、杜甫以外の文人や総集の受容についても確認・考究する。

3. 研究の方法

目的に応じて以下のように研究を行う。

については、日本中世に出版された五山版『集千家註批点杜工部詩集』が所蔵されている機関を調べ、それぞれに所蔵される『集千家註批点杜工部詩集』について、書き入れがなされているかどうか調査する。

また、前研究の続きで、五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の書き入れにも着目し、書き入れ抄の価値について考察する。その上で、同様のことが『集千家註批点杜工部詩集』の書き入れにも言えるかどうか、調査・考察する。

については、杜甫の詩(「キ府詠懐」詩)が中世禅林でどのように解釈されていたのか確認し、更にその解釈がどのような価値を有するのか考察するため、中国における諸注釈書の解釈と比較する。

次いで、慶應義塾図書館に所蔵される『大堂供奉帳』の紙背に書かれている抄が杜詩の抄であることが知られている。そのため、そ

の杜詩抄を翻刻し、他の杜詩の抄物と比較することで、どのような特徴を有するか考察する。

杜詩以外の作品集についても、禅僧がどのように解釈していたのかについて考察する。とりわけ、禅僧が『古文真宝後集』の作品について、どのように解釈していたか考究する。

については、『五山文学全集』と『五山文学新集』に収められている各禅僧の詩文集、及び禅僧が製した文学作品において、杜甫がどのように詠出されていたかについて精査する。これまで初期（鎌倉時代末期～南北朝時代末期）の禅僧の詩文にどのように杜甫が詠出されていたかについて考察したので、本研究期間では、中期（南北朝時代末期～応仁の乱頃）と後期（応仁の乱頃から室町時代末期）の禅僧の詩文に着目する。そして各時期にどのように受容が変化しているかについて追究する。

・ ・ はいずれも深く関連している。それぞれの点を調査するも、総合的に研究を深めていくことにする。

4. 研究成果

・ ・ の目的に応じて以下に研究成果を述べる。

について、日本中世に出版された五山版『集千家註批点杜工部詩集』の所蔵機関を確認中である。現在、三本において、膨大な量の書き入れを確認したところである。今後、それらの書き入れが、誰によって書き入れられたのか、どのような解釈をしているのかについて考究するつもりである。

書き入れの価値を明らかにするため、杜甫以外の別集を調査した。柳宗元の五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の巻四十二・四十三における書き入れを調査したところ、まだ知られていない劉辰翁の批点を書き込まれていることが判明した。それによって日本に劉辰翁の批点柳宗元集が伝わっていた可能性を示唆した。

について、杜甫の「キ府詠懐」詩の詩句「身は許す 双峰寺、門は求む 七祖禅」について検討した。まず中世禅林においては、早く虎関師錬が中国宋代の注を真っ向から否定し、一方で曹溪の宗趣を聞き、一方で北宗の七祖・普寂に求めたいと解している。『続翠抄』では、双峯寺を韶州の双峰寺と特定し、後期の注釈に引き継がれている。妥当と結論した解釈と異なる点はあるが、「七祖」を北宗・普寂と解した点は、禅僧の貴重な卓見・成果といえることを論じた。

慶應義塾図書館に所蔵される『大堂供坊帳』の紙背に書かれる杜詩抄を翻刻し、江西龍派講『杜詩続翠抄』・雪嶺永瑾講『杜詩抄』と比較したところ、全くの別系統の杜詩抄ではないことが判明した。今後更に詳しく調査することで、誰の手による抄なのか解明されると思われる。

杜甫以外の作品集の抄物として、鸞岡省佐撰『古文真宝不審』を翻刻し、本文解説を行った。それによって鸞岡省佐が明人の祝允明・唐庚等と交流している様相が分かった。また、『古文真宝後集』に所収される作品の解釈について、禅林における解釈がいかなる価値を有するか検討した。具体的には、「秋風辞」の注にある「三韻一叶」「六韻一叶」に対する禅僧の種類の解釈を確認し、その内の一つの解釈が現在における妥当な解釈と等しいことを論じた。次いで「滕王閣序」の制作年についての禅僧の解釈を確認し、現在における諸説と比較すると、禅僧の解釈が傾聴に値することを論じた。

について、日本中世禅林の中期における杜詩受容の一面を考察した。一面として杜甫の忠義の面に着目した。すでに初期の禅僧から杜甫の忠義は着目されていた。ただし、その詠出に関しては、杜甫の詩句や逸話を取り上げ、間接的に杜甫の忠義を称揚するにとどまっていた。それが中期になると、杜甫の名を直接に挙げ、忠義と共に詠出するようになる

り、また杜甫の詩を読んだ感想として、忠義を感じ取ったことも詠じるようになった。初期に較べると、杜甫と忠義がより明確化され、杜詩における忠義がより深く理解・考証された結果であることが分かった。このように杜甫の忠義が高く称揚されるようになったのは、先ず第一に禅林と武家社会との関係がより密接になったため、国家に必要な忠義が頻繁に取り上げられるようになったことがあげられる。また儒学思想を会得することは詩文を製するに当たって必要な要素として認められていたことも大きな要因の一つである。こうした要因によって、禅僧は初期より忠義の詩人として名高かった杜甫をいっそう敬慕したことを論じた。

さらに一面として、杜甫及びその詩の禅的要素に着目した。中期の禅僧は杜甫と禅の関連について触れた作品を考究し、それらの作品から得られた禅的要素・禅境を自身の作品に援用するようになった。また杜詩作品を追究し、その内容に含まれる杜甫の悟道の境地、禅に通じる自然観を読みとり、自身の作品に援用するようにもなった。中期においては、「禅熟すれば詩も熟す」という文学観を広めるため、杜甫が寺院で詠んだり、賛上人や已上人と交流したことによって、優れた作品を創出し得たことを示す必要があったのである。中期禅僧が、中国における杜甫と禅に関する逸話を知りながら、それらの逸話を自らの作品中には引用しなかったのは、得道修行を積まない者に杜詩中の禅境は感得できないことを示すためであったことを論じた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

太田 亨、日本中世禅林における杜詩受容 忠孝への関心(中期の場合)・詩文詠出の様相、『中国中世文学研究』、査読有、第

65号、2015、pp66~85

太田 亨、日本中世禅林における『古文真宝』解釈 「滕王閣序」の制作年に着目して、『中国古典文学研究』、査読無、第12号、2014、pp19~27

太田 亨、日本中世禅林における柳宗元詩受容の一側面 五山版の書き入れをめぐる、『中国中世文学研究』、査読有、第63・64号、2014、pp356~375

太田 亨、日本中世禅林における『古文真宝』受容の様相 「秋風辞」注の「三韻一葉」「六韻一葉」をめぐる、『愛媛大学教育学部紀要』、査読無、第61巻、2014、pp259~274

太田 亨、慶應義塾図書館所蔵『大堂供坊帳紙背杜詩抄』(仮称)について、『中国古典文学研究』、査読無、第11号、2013、pp1~28

太田 亨、日本中世禅林における杜詩受容 禅的要素に着目して(中期の場合)、『愛媛大学教育学部紀要』、査読無、第60巻、2013、pp316~330

太田 亨、中国文学側の視点からの禅林文学 柳宗元の受容を中心に、『名古屋大学中国語学文学論集』、査読無、第24号、2012、pp31~54

太田 亨、日本中世禅林における杜詩解釈 「キ府詠懐」 身は許す 双峰寺、門は求む 七祖禅 について、『中国中世文学研究』、査読有、第61号、2012、pp46~68

太田 亨、鸞岡省佐『古文真宝不審』について 翻刻と本文解説、『愛媛大学教育学

部紀要』、査読無、第 59 巻、2012、pp313～328

〔学会発表〕(計 3 件)

太田 亨、日本中世禅林における柳宗元詩受容の一側面 五山版の書き入れをめぐって、第五十九回中国四国地区中国学会大会、2013 年 6 月 1 日、愛媛大学(愛媛県松山市)

太田 亨、日本中世禅林における杜甫と禅後期の場合、国際高等研究所プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究 - 禅をケーススタディとして -」、2013 年 2 月 17 日、国際高等研究所(京都府木津川市)

太田 亨、中国文学側の視点からの禅林文学 柳宗元の受容を中心に、名古屋大学中国文学研究室定例会、2012 年 11 月 30 日、名古屋大学(愛知県名古屋市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 亨(OOTA TOORU)
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：80370021

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：